

## 光原百合「旅の編み人」における「愛すべき不器用」

荒木, 正見  
総合文化学会

<https://doi.org/10.15017/1955359>

---

出版情報：総合文化学論輯. 5, pp.17-27, 2016-11-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン：

権利関係：

## 光原百合「旅の編み人」における「愛すべき不器用」

荒木 正見

小論は光原百合の短編集「扉守 潮ノ道の旅人」における一篇「旅の編み人」を解説する試みの一端である。

この小説のテーマは「存在していることで自分も周囲も不幸になってしまう『想い』というのが、この世にはある」、「その想いを込めた編み物を解き無に帰して再び新しい編み物へと生まれ変わらせなければならない」ということだし、主人公のひとり、友香はそれを悟ることによってひとつ大人への階段を登る。そのきっかけを与えてくれたのがもうひとりの主人公、新久嶺であり、「編み物」である。もちろん、「編み物」は物質的な編み物であると同時に心の編み物でもある。

このようなテーマの展開を背景として、小論で特に着目したいのは、主な登場人物の二人の女性、大学生の藤木友香と、編み物作家の新久嶺との二人が極めて不器用な人物として述べられている点である。特に友香は後述するように冒頭から不器用を持て余している若者として登場し、車中で出会った新久嶺の不器用さに反発しながらも「二十代後半にも四十代前半にも見える」(209頁)「年齢の見当がつきにくい」(209頁)年長の彼女の一連の行動と才能によって、友香自身の不器用を乗り越えて成長していく。

この短編集の他の作品に比べても、かくも不器用な主人公は異質である。作者からも、他の主人公がある意味でまともなもので、この作品では少し変わった主人公を設定したむね伺ったが、それゆえにこそ、作者が直観的に与えた主人公の性格や行動をより深く理解してみるのもまた作者の術中かもしれない。

このような意味で、この流れの中に含まれる作者の思いや不器用さの意味などを筆者なりに確認したいというのが小論の目的である。

ところで「筆者なり」には後に展開するような医学心理学的なアプローチを意図しているという含みがある。文学表現の内部構造や文法、レトリックなどからこそ読み取るべきだという文学の王道はもちろん尊重しなければならないが、一方で作者の意図を踏み越えてわれわれの生き方の指針へと読み解くこともまたひとつの鑑賞態度ではないだろうか。ましてこの作品は読了した瞬間に自分がずっと成長出来たような快感を覚えるのである。

このような意味において、この不器用さを近年さまざまな側面から問題になっている「大人の発達障害」の視点から考えてみて、翻って我々自身の生き方の指針としてみたい。そして、作品論としては、そのこととテーマを形作る編み物とが底で結びついていることをも最後に指摘したい。

なお、引用テキストは光原百合『扉守 潮ノ道の旅人』（文春文庫、文藝春秋社、2012年）を用いる。

## 1. ストーリーと問題のありか

まずストーリーを確認しつつ、そこに流れる不器用さの状況を確認する。

『今日もダメだったあ』（203頁）で始まるこの小説は、渡せるあてのない憧れの人へのマフラーを編んで、そのラッピングの紙袋をすでに四枚も無駄にしたことで、友香の不器用を象徴している。

そのことを自己反省している帰宅途上の車中で見かけた、編み物の腕が確かな女性が新久嶺であるが、新久嶺が居眠りをしている隙に傍らの黒い布袋から「桜色のものが、まるで自分の意思を持つかのように、もぞもぞとせりあがって」（206頁）、「桜色の二枚の羽（のようなもの）をたよりなげに、しかし確かに動かし」（206頁）て、窓の隙間から外へと飛び出していったのである。

目を覚ました新久嶺は、袋を覗きこんで驚き、そばに座っていた友香に「何か出てくるのを見なかった？」（206頁）と尋ね、友香は「礼儀を知らないヤツ」（206頁）という印象を持ちつつも教え、到着した友香の自宅近くの潮ノ道駅で二人降りてから二人の関わりが進む。

その関わりは傍若無人な新久嶺に対して「わざと不愛想に」（210頁）ふるまう友香というまるで敵対的な疎遠さで開始する。

新久嶺が友香に案内させたのは友香の大叔父、住職の了齋が住む持福寺である。了齋はこの短編集では常に狂言回しとして登場する。「ふざけた爺さん」（211頁）とも言われるが、町の活性化に尽力し、また、この町を次々に訪れるやや不思議な人々と深いところでの知り合いでもある。この小説でも新久嶺の正体を知っているようなのである。

「それで、今回は何が逃げ出したんじゃ」（214頁）とすでに起こったことを見通している。それに答える新久嶺の言葉に作者が常に意図している、いわばこの短編集の通奏低音のような概念が現れる。「この町がこんなふうに『力』に満ちているなんてこと」（216頁）である。このことは後に考察する。

さて、逃げ出したのは「小さな赤ちゃん用の靴下—それも生まれることのできなかつた赤ちゃんの」（216頁）である。それも「わが子の誕生を待ち望む母が実家で出産準備中に

編んだものだが、不幸にも出産のとき、二人とも命を落としてしまった。」(217頁)という不幸な過去を背負い、新久嶺に編み直しを依頼されたものである。

では動き出したのは、死んだ子供の幽霊のせいかということそうではない。生まれる前の赤ちゃんの魂はまっさらなので「お母さんに抱かれて、二人でまっすぐに天国だか極楽だかに行ってる」(217頁)のだから。では、動かしたものはというと「編んだ者の、編んでいる間の『想い』の魂」(217頁)だとされる。

ここで小説技法として挿入されているのが、インターネット SNS における書き込みである。それは、ピンクの蝙蝠が白昼ひらひらと飛んでいたというものと、まだ歩けない赤ちゃんが目を離れたすきに部屋の中を大幅に移動していたというものである。SNS という仕掛けによってストーリーの流れに掉さず手法は、ファンタジー小説のいわば中核的なできごととして起こった不思議な出来事を強調し、同時に靴下の性格を明らかにする。

新久嶺はそれを掴まえるべく巨大な蜘蛛の巣のようなものを編み、友香に案内させて、この町の中にある「忘れ門」、すなわち昔の山門が、鉄道や道路で参拝路が寸断されたために町中に残ってしまった門に着く。そこで、門に蜘蛛の糸のようにこの編み物を張り、靴下を優しく呼びよせて掴まえる。

編み物の靴下をすぐに解き始めた新久嶺に、友香が「かわいそう」(237頁)という、新久嶺は「存在していることで自分も周囲も不幸になってしまう『想い』というのが、この世にはあるんだ。そういうものは無に返して、今度はもっと幸せな形で生まれておいで、と祈るしかない」(237頁)と諭す。そして「安らかに、無におかえり。あたしはあんたのことを忘れないから。この手であんだもの、ほどいたものことは、目の数から形まで、決して忘れはしないから」(238頁)と子守唄のように口ずさみつつ解いて桜色の毛糸の玉にしてしまう。

二日後、その毛糸は「ふんわりした桜色のミトン」(238～239頁)に生まれ変わっていた。それは亡くなった母親の母親、赤ちゃんのお婆さんになるはずだった人から二人の形見にと編み直しを頼まれていたものだったのだ。「こうしておけばお母さんが凍えそうなき、暖めてくれるだろう」(239頁)と、編み物の最もすばらしい性質を重ねながら新久嶺は解説する。

そのまま駅に見送りに出た友香は、自分が編んだマフラーを解いた毛糸玉を例のラッピング袋に入れて新久嶺に託す。自分のために何かに生まれ変わらせてほしいと。それは、「存在しているせいで自分も周囲も不幸になってしまう『想い』というのが、この世にはある」(140頁)ということを知ったからに他ならない。

このことで、友香は少しだけ不器用を乗り越え、成長したといえる。

### 3. 不器用と才能と成長

ストーリーを追ってみると、大きな流れとして、友香の、不器用を乗り越えた成長があることは明らかだが、問題はその成長を助けた新久嶺である。作者が自ら生み出した登場人物としての新久嶺を愛しているのは読み取れるが、それにしても若者の成長を助ける役割を以て登場したにしてはどうしても落ち着きがなく頼りない。

はじめのシーン、潮ノ道駅での友香に対する傍若無人な態度や、相手の言葉に反応できずに自分だけの世界からの発言で押し切っていく態度、「無礼にも友香を指さした」(212頁)というような自己中心的態度など、社会性の無さが目立つ。反面、感受性は豊かで他人を分析する能力や愛情の豊かさを認知してはいるが、「インターネット」を知らない新久嶺に一生懸命教える友香に「あんた、空回りするタイプだって言われたい？」(225頁)と、逆鱗に触れるようなことを平気で口にするような空気が読めないところが目立つ。

さらには「方向音痴ならそれを自覚して行動してもらわないと、はた迷惑というものだ。」(228頁)というように、方向音痴なのにその自覚もなく、身勝手に動き回る。

お得意の編み物においても、「ものも言わない勢いで編み物に没頭し、完成させた」「なかなかその気にならないが、その気になれば仕事が速い」(238頁)と、気まぐれである。

と、このような新久嶺の性格を列記してみると、近年注目されてきた「大人の発達障害」概念が浮かんでくる。(なお、のちにDSM5に言及する際に確認するように、「障害」という文字に関しては不適切ではないかという説もあり筆者もその意見を支持するが、我が国の厚労省の共通語としてこの文字が用いられているので、ここではいわば記号としての学術語としてこの文字を用いる。)

我が国で「大人の発達障害」概念を定着させたのは星野仁彦『発達障害に気づかない大人たち』(祥伝社、祥伝社文庫、2010年初版/2012年)といっても過言ではない。

新久嶺の行動パターンはその中でも特に重視されている「注意欠陥・多動性障害(ADHD)」に多く符合する。

『発達障害に気づかない大人たち』では、このADHDの特徴が次のように列記されている。

まず、基本的症状としては、①多動(運動過多) ②不注意(注意散漫) ③衝動性 ④仕事の先延ばし傾向・業績不振 ⑤感情の不安定性 ⑥低いストレス耐性 ⑦対人スキル・社会性の未熟 ⑧低い自己評価と自尊心 ⑨新奇追求傾向と独創性、などが挙げられている。

また、その他の随伴症状としては、⑩整理整頓ができず、忘れ物が多い ⑪計画性がなく、管理が不得手 ⑫事故を起こしやすい傾向 ⑬睡眠障害と居眠り ⑭習癖 ⑮依存症や嗜癖行動に走りやすい（「物質依存」「行為依存」「人間関係依存」） ⑯のめりこみとマニャックな傾向などが挙げられている。（『発達障害に気づかない大人たち』50～98頁）

このようにみると新久嶺の行動が上記の多くに符合することが分かる。

後に述べるように、完全な人間はいないという前提から近年、発達障害の適応範囲が広がられたが、厳密な基準設定は医学に任せるとして、発達障害を発達障害として認める大まかな診断基準は杉山登志郎『発達障害のいま』（講談社、講談社現代新書、2011年）によれば「社会的適応障害を生じている」および「特定不能の障害」とされ（『発達障害のいま』48～49頁）、一般的な言い方をすれば「社会的に困っている」ことに拠るとされる。

このようにみると新久嶺自身は別に困ってはいないようでもあるが、他方、新久嶺の行動はやはり周囲を困らせていることにおいて、ADHDの可能性が大きいといえよう。

ところで一方、新久嶺の編み物の才能は群を抜いている。

発達障害を持つ反面、他が追従できない才能を発揮することは古くから知られており、ジョン・ランドン・ダウン（John Langdon Down＝イギリス）は、現在ではサヴァン（savant）症候群と呼ばれている状態について、すでに1887年に報告している。

『発達障害のいま』では、「発達障害」的な人間はいわば当たり前存在しているという前提で「発達凸凹」という呼称を用いている。そして、「発達凸凹＋適応障害＝発達障害」（44頁）と規定している。この凸部分はむしろ優れているとされる。

これらは、脳の補償作用と考えても良い。発達障害は、いわば無限に多様な原因に起因するそれぞれの脳のシステム障害だと考えられ、その障害を補うためにある部分が特に発達するという考え方である。

よく天才は異常行動が目立つ、などと言われるが、因果関係的には、異常行動を起こすような脳だから天才になったというべきであろう。

さて、新久嶺の編み物の才能をこのようなものと捉えると、その不器用さこそが編み物の才能を生み、「忘れ門」では素晴らしい母親となって亡き赤ん坊の靴下を呼び寄せる力になったのだと、深く愛すべき不器用に思えてくる。

そして、その愛すべき不器用さに翻弄されつつも、そこに起因した優れた才能と個性に影響されて、友香は自らの不器用な愛をきっぱりと諦めるのである。これこそが彼女の成長である。

#### 4. 場所と我々の不器用

ここで、この小説のもうひとつの通奏低音に言及すべきであろう。

それは「潮ノ道という場所」である。

「潮ノ道」は作者が「あとがき」で「多くの方がお気づきのとおり、潮ノ道は作者自身の故郷・尾道をモデルにしています。」(302頁)と述べているように、広島県尾道市をモデルにしている。そして「風景や街並みの様子はかなり忠実になぞっていますので」(302頁)と述べられるようにたしかに現実の尾道を彷彿とさせるような美しい表現が満ちている。

例えば友香が新久嶺とはじめに出会う車中の様子「大学最寄りの駅から自宅近くの駅まで、山陽本線各駅停車で一時間ほど」(204頁)、「東へと向かう電車」(205頁)とくれば大学はもし国立ならば広島大学か、などとリアルに思えるほどの具体的な記述である。そして、山陽本線上りの尾道駅少し手前はまさに「鉄道は山すそに貼り付けたリボンのようなごく狭い平地をなぞって走っている」(205頁)し、「すぐ脇に防波堤があつて、その向こうはいきなり海だ」(205頁)と述べられるそのままである。このあたりの車窓の景色も「南側の座席に座ればゆったりとうねる海に大小さまざまな島、北側の座席に座れば雑木林や柑橘の畑が続く日当たりのいい山の斜面と」(205頁)、などと、ごんごんという列車の揺れさえ聞こえてくるようなそのままの景色である。列車が到着した潮ノ道駅＝尾道駅周辺の描写も同様に現実そのままである。さらに、この町の住宅地や商店街などや、それらが三つの山と狭い水道を挟んだ対岸の山に囲まれている地形的様子も、と作者の鋭い観察力と闊達な筆に導かれて読者は潮ノ道に浸ってでもいるかのような気分になり、そこで展開する不思議な物語を当然のように受け入れるのだが、実は作者の理知的な意図に知らない間に引き込まれているのである。

物理的にも心理的にも、二人の女性主人公がこの町を歩くがままに、まるで自分の町であるかのように読者が導かれて行く先は、かの「忘れ門」である。それは「新久嶺によればここはちょうど、四つの霊山とやりに囲まれた領域の、東西南北の中心にあたるどころだという。」(233頁)というやはり物理的にも心理的にも求心的な中心である。現実の尾道の古い街角にあるこの門が本当にそのような意味があるのかは不明だが、作者の想像力がここに読者を強く導く。起こったこと、この小説のクライマックスについてはいうまでもない。

そして、現実の尾道の描写を詳細に組み込むことで、ここで起こった出来事もまた現実になりそうなきさえするのである。

かく創作する筆力に脱帽するしかない。

さて、この場所がまた、研ぎ澄まされた都会ではなく、かといってほどよい町でもあり、しかも古い歴史を持ち、寺社が溢れる坂の町であることが、二人の不器用を微笑ましく見せてくれる。

焦点は、最後の「違う違う！駅はそっちじゃないよ！」(241頁)によって象徴される新久嶺の並外れた方向音痴である。描写されたような町だから方向音痴にもなり易いし、発達障害でも生きてゆけるし、そのような不器用者でも十分暮らせる暖かい町である。

この、町と発達障害と我々についての考察がまとめになるが、ここで発達障害概念についての最近の変化が参考になる。

精神疾患の診断の目安のひとつに、“Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders”がある。この英語原著が19年ぶりに全面改訂され、第5版が刊行されたのが2013年、日本精神神経学会が邦訳を出したのが2014年である。我が国の医療においてはこの邦訳版がカルテ記入などのスタンダードにあたるので、これを参考にすると興味深い点が見えてくる。

すなわち『DSM5 精神疾患の診断・統計マニュアル』（日本精神神経学会日本語版用語監修、医学書院、2014年）発達障害部分（神経発達症群／神経発達障害群）の主な改定点は以下の通りである（16～17頁、27頁～）。

1. 細かいもの（例えば、アスペルガー障害やレット障害など）が、①自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害に吸収される。
2. それ以外は、②知的能力障害群、③コミュニケーション症群／コミュニケーション障害群、④注意欠如・多動症／注意欠如・多動性障害、⑤限局性学習症／限局性学習障害、⑥運動症群／運動障害群、⑦他の神経発達症群／他の神経発達障害群と分類されている。
3. Disorder を症と訳すか、障害と訳すかという議論もあったが併記されている（7頁）。

1. については、それまで細かく分類されていた諸症状がくくられて大まかな区分になったことを意味する。また1. 2. については、その病的基準が社会的不適応のパターンに拠る分類であることを窺い知ることが出来る。しかし、どこから病気なのか、となるとその基準設定には困難が予想される。

DSM5には、精神疾患の定義として次のように述べられている。

「精神疾患とは、精神機能の基盤となる心理学的、生物学的、または発達過程の機能障害によってもたらされた、個人の認知、情動制御、または行動における臨床的に意味のある障害によって特徴づけられる症候群である。精神疾患は通常、社会的、職業的、または他の重要な活動における著しい苦痛または機能低下と関連する。よくあるストレス因や喪失、例えば、愛するものとの死別に対する予測可能な、もしくは文化的に許容された反応は精神疾患ではない。社会的に逸脱した行動（例：政治的、宗教的、性的に）や、主として個



人と社会との間の葛藤も、上記のようにその逸脱や葛藤が個人の機能障害の結果でなければ  
精神疾患ではない。」(20頁)

たしかに定義としてはこのように記されるべきであろうが、それ自体相対的な要因が大きいことは一目瞭然である。例えば「文化的に許容された反応」ということは、時代、場所などによって病気かどうか異なるということである。

科学的客観性を重視するならば不安定な定義といわなければならないものの他方、現実  
に生きている人々にとってはむしろこの不安定さが救いになる。すでに述べてきたように、  
脳のシステム異常が発達障害の原因だと述べてきたし、その原因物質の特定も為されてい  
るものもある。しかしさらにその原因については無限な原因を想定せざるをえない。

裏を返せば誰もが完全ではないのだから厳密に言えば誰もが発達障害を背負っている可  
能性を持っているといわなければならない。事実それだからこそ大人の発達障害について  
は、我が国でも 2010 年代まで注目されなかったのである。「多少不器用な人」で済んでい  
たものが、社会の発達に乗り切れない人として病人と判断されるようになってきた。この  
ことは、治療でき、教育する指針を考えるようになったという意味でよいことではある。  
しかし、肝心のその基準は相対的なものである。徒に不安を感じる人も生じている。

さて、いまふたたびこの作品「旅の編み人」を振り返ると、新久嶺の病的な不器用や、  
友香の不器用に暖かい視線が寄せられていることが分かる。友香はともかく新久嶺の方  
向音痴に象徴される不器用さは、社会人としての危険性さえ感じさせる。

しかし、作者は見捨てない。むしろ、優れた、サヴァンな要素をフル活用させることで、  
友香を救い、迷える魂を救う優れた存在として描く。そして背景として、この町、潮ノ道  
こそがその能力を強く発揮できる稀有な場所であることを豊かに表現する。

このすべてに我々の生き方へのヒントがある。

個人のほうだけに着目すれば、我々は時には治療しなければならないような心理的状態  
になることは当然だし、一生治らない発達障害だってあるだろう。社会的不適応の極は生  
命の危機である。そのようなことが予想されるなら即座に治療にかからなければならない。

反面、われわれが無限の唯一の存在から生み出されたものだということを考えれば、時  
代的場所的に、危機が少ないならばそのままでも生きていける可能性が見えてくる。この  
場合、生きがいとしての自分なりの価値を見出すことが鍵になる。

友香が新久嶺を通して知ったのは「存在していることで自分も周囲も不幸になってしま  
う『想い』というのが、この世にはある」ということだったが、その『想い』が自分のも  
のならば、知る対象は自分自身である。しかもそれを知ることで友香は明るくなったの  
から、友香自身のもっと大きな自分を知ったことになる。少なくとも、このことを悟っ  
ただけで、今までより大きな自分になっている。これが成長である。

そして、この成長を助けたのが「潮ノ道」という場所である。

信仰対象が多いこと、ある種の「気」が集まるところ、ほどよい歴史的都会とほどよい

田舎の融和するところ、海が近く風光明媚なところ。挙げるときりがないほどに、作者はこの町に言及しているが、そのことのすべてが、多様な人々が癒され発達しながら生きていける町だということを暗示している。それだからこそ起こった奇跡なのだと。

そして今再び「編み物」に着目すれば、それは発達障害の持つ一種の「こだわり」との重奏性を感じさせる。「こだわり」とは「拘り」と書くように本来は「拘泥」というあまり良くない意味だが、発達障害は自らの脳が不完全であることを本能的に感じているゆえに、それを補う他者や事柄、事物に依存し、拘泥する。編み物を編むという行為は、決して悪い意味ではなく、ひたむきに細心の注意を以て、周りとは切り取られた空間を作って集中する行為である。その姿は、多くの発達障害で良きにつけ悪きにつけ指摘される自己中心的世界と似ている。

その編み物が他の人の爲であるならば、編む想いは深くなる。その想いが諦めるべき思いだったことを悟った友香は、編んだものを解くことで自らの人格発達を一步進める。

他方、新久嶺のほうはどうだろうか。命名の基になった、ギリシャ神話のアラクネを想起すると、新久嶺の発達障害的性格の理由が見える。アラクネは、織物に拘泥して神にさえ織物競争を挑み、蜘蛛にされてしまった女性である。大掛かりな機器を必要とする織物を、作者は車中などどこでも手軽に作業できる編み物に置き換えて新久嶺をより身近な存在として我々の前に登場させてくれる。その編み物は新久嶺のサヴァンな面だといえるし、それが作中では超越的次元で進行する。これだけの優れたものを発揮できる裏には深い発達障害を背負っていると解すればすべてが明らかになる。編み物に拘泥するという行為は、解くことによって、拘泥から逃れられる。新久嶺はここまでは悟っているのだが、結局はきわめて優れた名人的な編み人である。それゆえに編むことから逃れられない。実はそれゆえに発達障害からは逃れられないことにもなる。作者は、おそらくは発達障害などという面倒な規定などを思うこともなく、文学者としてさらりと、象徴的にこのことを述べている。自らの拘泥から逃れたのは友香だが、その友香はちゃっかりと自分の新しい未来に向けて新久嶺に編み物を依頼するのである。拘泥からの逸脱が治癒というのなら、論理的にはこれでは新久嶺は救われないではないか。でも、そのことが新久嶺の本質でもあるのだし、むしろとても魅力的な新久嶺を示唆してくれる。

さて、我々人間は意思を持つ生き物である。厳密な医学的定義に乗らない程度の発達障害は個人的には誰もが持っているが、医学との仲の良い関係を保ちつつも、自分でコントロールできる能力をも持っている。社会的には新久嶺のように自分の優れた点を以て社会に貢献することこそ重要である。同時にそれを実現するにふさわしい自分の「潮ノ道」を創造することである。これには仲間も必要かもしれない。しかし、お互いにお互いの不器用を愛しあっていけば実現可能性が増してくる。このように不器用もの同士が優れた点を認め合って腕を組めば人類はもっと豊かに発展するだろう。

まさに、不器用とは愛すべきものなのだと、発達や成長の手がかりなのだと、この小説

は暖かく、そして、ちょっと不思議に、教えてくれる。

最後に、いつもながらぶしつけな質問を投げかける筆者に対して、穏やかに、かつ、にこやかにお答えくださる作者光原百合先生と、不審な目付きでカメラを構える筆者の質問に誠実にお答えくださる尾道市民の方々に心からの感謝を捧げます。

引用参考文献：

光原百合『扉守 潮ノ道の旅人』文春文庫、文藝春秋社、2012年  
星野仁彦『発達障害に気づかない大人たち』祥伝社、祥伝社文庫、2010年初版／2012年  
杉山登志郎『発達障害のいま』講談社、講談社現代新書、2011年  
日本精神神経学会日本語版用語監修『DSM5 精神疾患の診断・統計マニュアル』医学書院、2014年

["Lovely Disorder" on "Tabi no Amibito(Travelling Knitter)" by MITSUHARA, Yuri]  
[ARAKI, Masami, 総合文化学会、哲学、心理学 ]

※この論文は以下の企画のために作成した原稿をもとに校訂・執筆したものである。

以下、記録として残すため、当該企画のインフォメーションを記す。

尾道市立大学芸術文化学部日本文学科光原研究室では、尾道学研究会と地域健康文化学会との共催により

「哲学／文学セッション【尾道という「場所論」と「場の力」～光原百合作『扉守』から～パートⅠⅤ】」と題した公開講演会を次のとおり開催します。

本学教授・光原百合の作品集『扉守』（株式会社文藝春秋）の各短編を解説するシリーズも第4回目となり、今回は「旅の編み人」を取り上げます。

内 容

1. 荒木文果先生講演「アラクネの神話と図像」
2. 荒木正見先生講演「愛すべき不器用」
3. 講師3人による「旅の編み人」についての対談

日 時：平成 27 年 7 月 1 8 日（土） 18：30～20：00

場 所：尾道市立大学サテライトスタジオ 1F（入場無料、事前申込必要）

〔山陽本線尾道駅より徒歩 5 分、本通商店街アーケード内＝尾道市立大学本館ではありません。街角の小ぢんまりしたギャラリーです。〕

講 師：荒木正見（九州大学哲学会会長・尾道学研究会顧問・哲学、心理学）

荒木文果（慶応義塾大学専任講師・美学美術史）

光原百合（尾道市立大学教授・文芸創作）

申 込：地域総合センター（電話 0848-22-8311 【代表】）

共 催：尾道学研究会、地域健康文化学会

後 援：山陽日日新聞社